



TITLE:

静脩 Vol. 6 No. 5 (1970.1) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 6 No. 5 (1970.1) [全文]. 静脩 1970, 6(5)

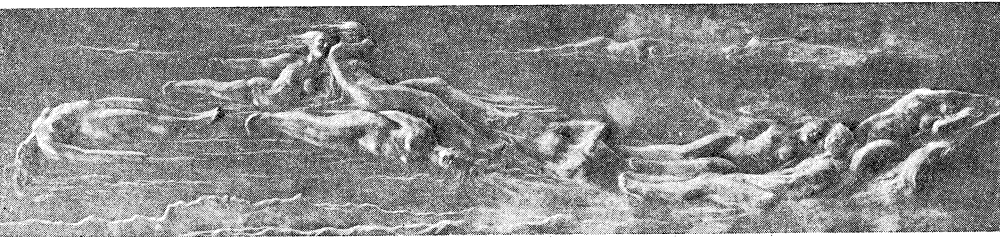
ISSUE DATE:

1970-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65934>

RIGHT:



まず現状のリアルな認識を

尾崎 芳 治

図書館にかぎらず、なにを改革するにもまず必要なのは、現状のリアルな認識である。リアルなというのは、たんなる物品や設備や人員の正確な調査ということではなくて、図書館の機能を実際に担っているのは関係職員であり教官であり学生だから、これらの人びとが現実を感じている問題や要求にリアルな認識ということである。

手近な例をとろう。経済学部には約26万冊の蔵書があるが、学部創設以来いまだにこの龐大な蔵書にみあう学部図書館の設置が認められないため、収蔵は6カ所に分散している。学生の閲覧用座席は、スペースの不足から、文部省基準という学生数の20%相当はおろか2%にも満たない。職員は、わずか15名のうち1/3は臨時職員である。ところで、こうした点にかんする数量的調査は、文部省の手でこれまでもなにか行なわれてきた。しかし、かつて一度もさきほどの意味でのリアルなものになったためしはない。醒めた数量的事実のうしろにある生きた人間の声をきく姿勢もきかねばならぬ制度的枠づけもないからである。

実際には、スペースと職員の絶対的不足は、致命的な問題を生んでいる。保管と利用は、「ズタズタ」となっていて、図書室は、学生にとって「行っても手に入らず読めず読む気もしない」ところ、職員にとっては「来られたら困る」ところとなっている。教育の機関としての図書の機能は、ほとんど死んでいるのである。実は、最近学生代表が、学部図書委員会に加わるようになって、広く学生の意見を聴取しようとしたとき、初めにほどの要求も出なかった。ほとんど利用したことのない人間に具体的要求をもてるはずがなかったからである。「要求なし」の背後に要求がかくされていることが、今ようやく明らかになりつつある。他方職員は、その日その日の受け入れと整理だけでせいっぱいである。図書の仕事は永年にわたって積み上げていく性質のものだから、この状態は、ときにとりかえしのつかぬ問題を累積させ、大混乱を招く危険をはらんでいる。さらに、本来図書職員は、その相当部分がたんに「図書を取り扱う人」でなく「図書を知っている人」からなっていなければならないのに、これでは書誌専門家の養成も自己研修も全く問題にならない。この点は、現在図書の業務が、机や椅子なみの物品管理と同一視されているという根本理念の問題にもかかわっている。研究の協働者であり学習の助言者でありそれにふさわしい自主権をも与えられている職員をもつ図書館の存在を考えてみれば、現状は研究のための機関としても半ば死んでいることがわかる。勤務条件にかんする図書職員の要求のなかに、図書館の、ひいては大学の研究・教育機能の、根本的革新のための大きな力がかくされている、といってよいのである。

教官の要求とならんで職員と学生の声を改革の力に加えるために、各学部図書委員会と図書館商議会を、職員、院生、学生の各代表に開放するのは、改革にまず必要な一つの具体的行動ではあるまいか。

1969.12.25

(経済学部助教授)

図書館問題を検討改善するための 商議会専門委員会スタート

現在学内では種々の委員会がつくられ、新しい大学の構想や大学の改革が検討されつつある。このようなときにあたって、附属図書館および学部図書室をふくめた全学の図書系部門にあっても、それらのうごきと決して無縁ではありえない。むしろ大学改革とともに考えていかねばならぬ多くの問題をもっているのである。以上のような趣旨で、昨年11月28日に附属図書館商議会が開かれ（商議会の項参照）、附属図書館および部局図書室のもっている種々の問題を検討するために、商議会のなかに新たに専門委員会を設けることになった。そしてその第1回の会議は12月24日に開催された。委員会のメンバー（1部暫定）は次のとおりである。

穴戸圭一教授（委員長、図書館長）、織田武雄教授（文）、小倉親雄教授（教育）、上山安敏教授（法）、大野英二教授（経）、小松醇郎教授（理）、脇坂行一教授（医）、犬伏康夫教授（薬）、林千博教授（工）、貝原基介教授（農）、保田清教授（教養）、榎木義一教授（工研）、満久崇磨教授（木研）、青山秀夫教授（経研）、森鹿三教授（人研）、植竹久雄教授（ウ研）、湯川秀樹教授（基研）、岡村誠三教授（原子炉）（順不同）

一 会 議

○附属図書館商議会 <とき：昭和44年11月28日（金）>

〔議題〕 本学における図書館の諸問題を検討改善するための委員会を設ける件

館長よりその要旨と必要性の説明があったのち、種々提起された問題点を論議の結果、次のようなことが確認された。

①商議会の一組織としての委員会をまず作る。

②したがって、構成メンバーはとりあえず部局長を除く商議員とし、研究所関係からの委員の人数は研究所側に一任。

③委員会結成の上で改めて職員・学生の参加問題等について考慮する。

④昭和41年4月に出された「京都大学附属図書館報告書」とは時点的に相違がある。将来は大検委・月曜会の方とも提携できる状態にもって行く。

⑤委員会の終了時期は明確ではないが、館長任期の問題もあり、また大検委や月曜会との関連性も充分考慮にいれなければならないので永続的なものではない。

⑥議長は館長がその任にあたる。

○図書館商議会専門委員会 一第1回一 <とき：昭和44年12月24日（水）>

今回ははじめての会合であるため、今後この会議でどんな問題を検討するか、またどのような方向に会議をすすめていくかについて委員間で意見が出され、毎月1回水曜日に開催されることなどが決定された。次回からは、附属図書館長の地位、商議会のありかた、部局図書委員会・部局図書室に関する事、附属図書館と部局図書室との関係、予算問題などについて、問題点の範囲をしばって逐次検討されていく予定である。

○赤外線標準スペクトル・チャート運営協議会 <とき：昭和44年11月7日（金）>

昨年度一括購入時からの経過・利用状況の概略ならびに44年度補充チャート410,230円の配分の割合について、館長より説明があり、学部内の化学教室数に比例する配分割合には各委員とも異議なく、下記の割当額が了承された。

今回の割当単位額	④	37,293円60銭
工 学 部	⑤	186,468円
理 学 部	②	74,587円

農 学 部	①	37,294円
薬 学 部	②	74,587円
化学研究所	①	37,294円

なお、この日の席上で、主に図書の収集面における協力を意図した「化学系図書こん談会」を発足させることもきまった。

○国立大学図書館協議会常務理事会

〈とき：昭和44年12月12日（金） ところ：東大図書館〉

まず、この6月千葉大学で開かれた第16回総会以後の各調査研究班、特別委員会の活動状況、および、総会で決定された要望事項について、8月7日文部大臣に直接要望したことが報告された。

議題としては、とくに岸本奨励賞の募集について意見がかわされ、本年度は例年より締切を早め、2月末日とすることに決定。また「新しい大学図書館像」に関する委員会の発足は、各大学における検討の進みぐあいとの関係で、あらためて考慮することになった。

○国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会 一第3回一

〈とき：昭和44年11月25日（火） ところ：大阪府臨海センタービル〉

関西地区で第3回目の標記懇談会は、近畿を主とする国公立各大学30館の参加を得て開かれた。午前中は主として国会図書館印刷カードの普及について国会図書館からその現状や問題点ないし努力目標が言及され、これに対し種々の観点から協議された。この印刷カードは、米国でLC（議会図書館）カードが広く利用されているように、わが国でも国会カードが使用できれば、図書館業務の合理化と標準化が大きく促進される重要な問題であるので、熱心な質疑応答がなされた。

午後は国会図書館業務の機械化計画について報告があり、コンピューター導入の第1次5カ年計画の段階では、主に洋書関係（LCのMARC IIテープを使用しているの収書、総合目録や逐刊目録の編さん等）、第2次の和書関係の計画について詳しい説明を聞き質疑を行なった。この会合の午前午後の問題を通じて、大学図書館に影響するところが大きいだけ、国会図書館に対する要望と期待が大きく、また今後われわれも国会図書館と緊密な連繫を保って行くことの重要性が確認された。

一講演会

▽欧米の大学図書館における機械化の現状 小田泰正（国立国会図書館業務機械化準備室長）

〈とき：昭和44年11月24日（月） ところ：楽友会館〉

昨年開かれたIFLAの総会、国際目録専門会議での報告および実際に見てこられた図書館を中心に、欧米の大学図書館における機械化の現状について述べられた。各国ともMARCへの関心が高まり、MARCテープを利用して大学図書館の機械化を進めていこうとする傾向にあること、更に各国がMARC IIのFORMATと互換性をもたせてNational Bibliographyの機械化を計っている。図書館の本格的なオートメーションはオン・ラインによらねばならないとのことであった。

図書館人としての立場からの講演であったので図書館関係者にとって大変有益であった。

▽赤外線標準スペクトルチャート（サトラー）の利用講習会

〈とき：昭和44年12月10日（水）〉

今回の講習会は利用者によるその使用法を理解して頂くため、附属図書館赤外線標準スペクトルチャート運営協議会（委員長宍戸館長）が主催して、工学部工業化学講義室で開催された。学内の関係部局から、化学系研究者約200人が参加したが、利用者に対する講習会としてはなかなかの盛況であった。

なお、この資料に関する解説は、すでに本紙の1969年1月号に工学部野崎教授の一文が掲載されているので、参照願いたい。

一言・ふたこと

E 学生の図書館に対する要求

光 藤 昇

経済学部では、現在学生が2名図書委員会に参加しています。これは、昨年(44年)の2月12日の学部長団交で確認し、4月、学生会の幹事会で選出され、6月21日の学生大会で正式に決定された学生代表です。僕はその1人として、学生の要求を中心に、学生からみたE図書館の現在での問題点とその解決の方向について少々述べてみたいと思います。

まず、E図書館の利用上、学生の占める位置から述べてみたいと思います。

9月から10月にかけてとったアンケートの結果をみると、約48%の学生はE図書館を全然利用していません。それでも、図書館がまとめた統計によると、昭和43年度には、学生の貸出総数は教官よりもはるかに多く、院生と肩を並べる立派なおとくいさんです。そして36年度に較べても約4倍強に伸びています。

ところが、利用上、学生は他の階層と較べて不便をしいられています。

われわれ学生は、僕の知る限りでは昨年より、一貫して、この不便を改善するように学部当局に要求してきました。

具体的には、学生図書の購入／複数購入／貸し出し冊数と期間の増加／学生に対しても開架にせよ／広いつ覧室をつくれ／資料室を学生にも開放せよ／ゼロックスを資料室に置き学生にも利用させよ／法経新館においては学生の要求を取り入れた図書館をつくれ／

以上のことを要求してきたのです。図書委員会においても、たびたび以上の要求について話しあわれましたが、話し合うごとに、図書施設の貧困、職員の過少、図書購入予算の少なさなどの問題にぶち当たります。これらは一言でいえば、図書予算の貧困の問題です。

われわれの要求を実現するためには、まず第1にEの4つの階層がともに文部省に要求をつきつけていくこと、第2に、近々実現されるといわれる法経新館に十分なえつ覧室をもうけさせるように学部当局に働きかけること、学生図書委員の新刊図書選択権の行使の具体化、学生の資料室利用、電子リコピー使用について図書委員会でさらに話し合うこと、以上のことが必要であると思っています。

(経済学部3回生)

法律図書館の相互協力 一法律図書館協会一 岸 本 年 之

現在、日本において、法律図書館の相互協力と、これを維持発展させるための法律図書館協会は、存在していない。その理由を類推してみると、まず、蔵書量10万冊以上を所蔵する法律図書館は数館に過ぎない。若しも相互協力などと言いだせば、その数館に圧倒的な負担がかかりはしないだろうという危惧が最大の原因だろう。かりに、上記理由を是認するとしても、その数館は、内外の法律文献をことごとく購入し、利用者の要求を満たしているか。「否」である。出版点数の少かった、自館ですべて資料を収蔵できたよき時代は過去のものとなっているのである。

この現状打開の道は、「相互協力」の推進によって、かなり改善されるに違いない。一例をあげれば、数館で、ある種の、特定な資料収集にあたって何等から調整がとられることが第一。その利用において、関係する利用者の利便をそこなわない方法が考えられることが第二である。出版点数に見合った予算措置がとられそうにない文教政策の現状では、自館の図書予算の実質的効率を高めることにもなるだろう。

近時、「情報検索と電算機」の声があわただしい。国立国会図書館は、米国議会図書館のMARCを受けついで10カ年計画をたて活動を開始した(図書館の窓 vol 8, no. 9)。一方、大学は紛争のさなかにあって、もろもろの「告発」を受けている。一図書館員として、

先ず自己の足もとをみつめる必要を痛感し、その中の一つとして、とりあげた。

(法学部図書室)

—資料紹介

ドイツの主要書誌

〔注〕 所蔵の「+」印は以後継続を示す。

○Deutsche Nationalbibliographie. 1931—

ライプチヒ（東ドイツ）で出版されている目録で、1842～1930年まで発行された“Wöchentliches Verzeichnis”の継続である。

A編 新刊リスト。ドイツに限らず、ドイツ語で書かれた市販出版物を網羅的に収録し、24の分類に配列している。著者名・件名の索引がある。週刊。なお、1946年以降、西欧で出版されたドイツ語資料については“Bibliographie der Deutschen Bibliothek, Reihe A”に継承されている。（文学部所蔵、1958+）

B編 政府刊行物、各種団体・機関の出版物、学位論文など非市販資料を収録。半月刊。

○Deutsche Bibliographie, 1951—

フランクフルト（マイン）で出版されている目録で、Bibliographie der Deutschen Bibliothekの継続として出版されている。

A編 市販出版物を25の主題に分類して収録し、著者名・件名索引を付している。この索引は月刊、季刊と累積している。週刊。なお季刊索引は“Österreichische Bibliographie”“Schweizer Buch”に収録されている資料も対象とされている。

B編 非市販出版物を収録。月刊。（文学部所蔵、1951—67 欠号あり）

C編 地図類を収録。月刊。

- a) **Deutsches Bücherverzeichnis;...** Leipzig, Verlag für Buch- und Bibliothekswesen. (副題, 出版社に変更あり)
1911—14, 1951+ (本館所蔵)
1941—50+ (文学部図書室所蔵)

- b) **Kayser, Christian Gottlob: Vollständiges Bücher-Lexikon 1750-1910.**

Leipzig, Tauchnitz, 1834-1911. 36v. (本館所蔵, 欠号あり)

- c) **Halbjahresverzeichnis der Neuerscheinungen des Deutschen Buchhandels mit Voranzeigen, Verlags- und Preisänderungen, Stich- und Schlagwortregister.**
Leipzig, Börsenverein der Deutschen Buchhändler, 1915-40. (本館所蔵)

a) ライプツヒで出版されたドイツの出版目録。ドイツ、オーストリア、スイスの出版業者による出版物（図書・雑誌・地図）だけでなく、主要官公庁出版物や、ドイツで出版されたドイツ語以外の言語の図書をも掲載している。使用の際は、著者名からでも、(著者名のないものや Wörterbuch, Lexikon, Jahresverzeichnis などは書名から) 探したい事項（主題）からでも検索できる。1951年以降は5年刊。最新の出版物を探すには不便な点もあるが、この目録以前のものとしては、本学には、b) c) があり、1750年以後のドイツの出版目録は、年代的には一応揃っていることになる。



工学部・教室図書室

原子核工学図書室

工学部1号館3階にある本図書室は昭和32年発足当初は教室自体が間借生活をしていましたが、34年から3期に分け教室固有の建物が完成し図書室も次第に存在を明らかにするようになった。現在は1号館初期の3倍の広さになり、年間予算も倍増して70万円となったが、60%は雑誌代に費している。研究用図書は講座が購入する方針だったので基礎的な本が多く、教室の構成が物理系を含むので外国物理学会の刊行物等があり他からの利用も多い。

広さこそ3倍になったが図書室用に造られた部屋ではなく煙突等のため壁面の利用は制限され、また情報化時代で雑誌の発行頻度種類もふえてスペースを捻り出すのに苦労しているが、学生数147名のミニ教室ではほとんどの人が研究室に机を持っているのを幸い教室全体が閲覧室であるという解釈で貸出規定はない。これは、図書室にある図書は、全教室蔵書数6,100余冊の中の約15%（雑誌についても和洋68種中の17種だけ）であるという現況に裏づけられてもいる。利用は完全開架式で借出し、返本とも利用者各人の良心に従って行なうことを原則としているが亡失その他のトラブルはほとんどない。

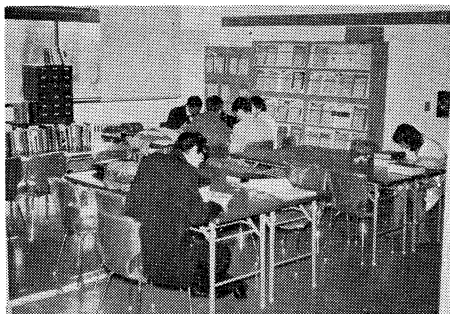
今後の課題としては目録の充実—誰もが手軽に目的の文献を探索できる—を最重点目標としているが職員1人では思うようにははかどらない。また図書室としての機能

をよりよくはたすために部屋の構造と設備の改善を掛としては望んでいる。

石油化学図書室

石油化学図書室は、昭和14年4月当教室が燃料化学教室として創設と同時に設立され、時計台西側の赤レンガ建物の一隅を占めていたが、このたび（昭和44年11月）工学部9号館の竣工と同時にその2階北西の隅に移り、現在ようやく閲覧のできる状態に整った。書庫閲覧室を合わせた総面積は112.5平方米、これに加えてコピー室が隣接しており、ゼロックス、電子リコピー、湿式複写器などの設備が整えられている。蔵書数は約5,000冊、購入雑誌は和洋合わせて68種年間図書費は約250万円である。利用形態は開架式であり閲覧者は自由に書庫に出入できる。職員は1名であり、目録体系は教室独自の方法を用いているため利用者に御迷惑をおかけしていることも多いと思う。

当図書室は単行本が蔵書の1/3を占めているので他教室からの利用者も多い。昭和26年の火災による焼失のため雑誌類は、1940年以降の新らしい年代のものが主となっている。



石油化学図書館

あとがき いよいよ昨年末に、図書館の問題を検討、改善する機関として、商議会専門委員会がスタートしました。この間の事情については、第2頁に詳報しているのでご覧ください。われわれ図書館員にとって期待するところ大なるものがありますが、利用者の学生・教職員のみなさんにとっては、大学改革のうごきの一環としても見のがすことのできないものでありましょう。この専門委員会の審議内容については、今後の「静修」の紙面に、できるだけのせていきたいと思っています。

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 6, No. 5 (通号32号) 1970年1月15日発行・編集発行人：岩猿敏生 発行所：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表771—8111 (内線) 2220~2238